京都市放課後対策事業検討会議　摘録

日　時　　令和２年１２月１６日（水）　１４：００～１５：３５

会　場　　職員会館かもがわ　３階　大多目的室

出席者　会　長　　神部　純一　（滋賀大学教育学部教授）
副会長　　稲川　昌実　（公益社団法人京都市児童館学童連盟会長）
〃　　鳥屋原　学　（京都市小学校長会副会長・京都市立仁和小学校長）
委　員　　内田　恵美子　（京都市小学校ＰＴＡ連絡協議会副会長）
〃　　木戸　玲子　（公益社団法人京都市児童館学童連盟施設長会副会長）
〃　　國重　晴彦　（公益社団法人京都市児童館学童連盟常務理事）
〃　　清野　志帆　（市民公募委員）
〃　　常山　由佳　（市民公募委員）
〃　　中村　薫　　（京都市小学校長会会計・京都市立向島藤の木小学校長）
〃　　野村　愛子　（京都市立中学校ＰＴＡ連絡協議会副会長）
【※会長，副会長を除き五十音順。敬称略】

事 務 局　　まずは，本年度新しく委員に就任された方の御紹介をする。
（委員及び事務局の紹介）
会長１名，副会長２名については市長が指名することになっているが，会長については神部委員，副会長は稲川委員，鳥屋原委員を指名する。

神部会長　　早速議事の方に入っていく。まずは，「京都市はぐくみプラン（京都市子ども・若者総合計画）」について，事務局から説明をお願いする。

事 務 局　　**＜資料１＞「京都市はぐくみプラン（京都市子ども・若者総合計画）」について**
・本市では昨年度まで，子ども・若者に係る計画として三つの計画（「京都市未来こどもはぐくみプラン」，「はばたけ未来へ！　京都市ユースアクションプラン」，「京都市貧困家庭の子ども・青少年対策に関する実施計画」）を推進してきた。
・これまでの取組みを一層深め，妊娠前から子ども・若者まで「切れ目のない支援」を一体的・総合的に進めるため，「京都市はぐくみ推進審議会」における御審議，市民意見募集の結果を踏まえ，今年度から令和６年度までの５箇年度を対象とする後継計画，「京都市はぐくみプラン（京都市子ども・若者総合計画）」（以下「はぐくみプラン」）を策定した。
・はぐくみプランは，前述の三つの計画を一体化するなど，本市の子ども・若者に係る総合

的な計画として策定した。その理念は「３　策定の基本理念」に記載されているとおり。

・「４　本計画における放課後対策事業の位置付けについて」だが，本市においては，はぐくみプランのなかに「京都市新放課後子ども総合プラン」を位置付け，学童クラブ事業及び放課後まなび教室の取組の推進についても触れている。

・本市では学童クラブ事業，放課後まなび教室共に希望，ニーズがますます高まっているが，いずれも実施場所や支援者を確保し，利用ニーズに応える必要がある。両事業の連携を取ることにより，子どもたちに，質の高い居場所づくりを行う必要がある。

神部会長　　この件について質問がなければ，議題に入る。

まずは，議題の「１　令和２年度の実施状況について」，事務局から説明をお願いする。

＜令和２年度の実施状況について（放課後まなび教室事業）＞

事 務 局　　**＜資料２＞　令和２年度の実施状況について**

・放課後まなび教室は，登録を希望する市内全ての小学生児童を対象に「自主的な学びの場」と「安心・安全な居場所」を提供する事業である。

・実施日は，原則として，月曜日から金曜日までのうち，週３日から週５日の間で実施することとしている。時間は，授業のある日は，授業終了後から最長で午後６時まで，長期休業中については，実施の有無も含めて学校により異なっている。ただし，今年度については，新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ，感染拡大防止対策等が整ったところから，可能な範囲で実施しているため，まだ実施できていないところや，週３日未満の実施となっているところがある。

・平成１９年度に５０校区で施行実施し，平成２１年度には全市立小学校区で実施している。

＜資料３－１＞　放課後まなび教室の実施状況

１　平成２８年度～令和２年度の実施状況

昨年度までは，市内の全小学校区で実施し，登録児童数・登録率は，少しずつ増えていた。しかし，今年度は，新型コロナウイルス感染症の影響により，１１月末時点で１６１の小学校区のうち１５２校区での実施となっており，登録児童数・登録率についても，こちらは１０月末現在の数値になるが，減少している。

ボランティアのスタッフ数は，学校数の減少もあり，減少傾向にある。

２　令和２年度の実施状況

例年と同様，低学年児童の登録率が高くなっている。

３　放課後まなび教室登録者のうち，学童クラブ登録者の推移（平成２８年度～令和２年度）

昨年度まで，人数，割合共に増えてきていたが，今年度は，新型コロナウイルス感染症の影響で，減少している。

＜資料３－２＞　令和２年度　放課後まなび教室学校別一覧（令和２年１０月末現在）

１０月末時点の小学校区単位の情報

＜令和２年度の実施状況について（児童館・学童クラブ事業）＞

事 務 局　**＜資料４＞　令和２年度 京都市児童館・学童クラブ事業の概要**

１　京都市児童館事業

児童館は，児童福祉法に基づき，児童に健全な遊びを与え，健康を増進する等といった視点で，０歳から１８歳までの児童とその保護者等を対象にしている。京都市には合わせて１３０館の児童館があり，本市の委託を受けた社会福祉法人等の団体により運営されている。

事業の大きな柱，分類としては，児童を対象とした子ども育成活動，子育て中の家庭を対象とした子育て家庭支援機能，地域における子育て支援の拠点としての地域福祉促進活動の三つの機能が中心といえる。

２　学童クラブ事業

学童クラブ事業は，仕事などのために保護者が放課後の時間帯に留守になる家庭の小学生児童を対象に実施しているものであり，こういった条件付けのある部分が，放課後まなび教室の仕組みとの違いと言える。全市で１３０館ある児童館のうち，１２９館で学童クラブを実施しているほか，学童保育所９箇所でも実施している。

平成２７年度に制度の大きな組み直しが行われ，対象児童の上限が３年生から６年生に広がった。共働き家庭の増加という社会情勢の変化により，少子化の流れがある中，本事業を利用する児童数は増加傾向にある。児童館の利用は原則無料だが，学童クラブ事業は，登録制になっており，所得に応じた利用料の負担をお願いしている。

＜資料５＞　「放課後ほっと広場」の実施状況について

・学童クラブ事業には，児童館や学童保育所以外の形態として，「放課後ほっと広場」という仕組みがある。放課後ほっと広場は，放課後まなび教室との連携の下，小学校の余裕教室等を活用して行う形態の事業で，現在は，今年度未開校分も含めると，資料に記載のとおり，小学校８箇所で実施している。

・学童クラブ事業と放課後まなび教室は，日常活動での情報共有に加え，ものづくり，工作のほか，例年であれば夏祭りなども，事業を延長して行っている。今年度，コロナ下においても，塗り絵を通じた交流等が行われている。

＜資料６－１＞　学童クラブ事業登録児童数（令和２年４月１日現在）

・学童クラブ事業の登録児童数は，全体で１５，１３５人と，昨年度と比べて４７８人増加した。低学年と高学年で分けると，低学年が１２，９４２人，高学年は３，１９３人であり，低学年ほど顕著に登録人数が多い。

・登録児童数は，１１年連続で増加しており，制度の大幅な見直しがされる平成２６年と比べると約１．５倍になっている。また，障害のある児童数は，今年度当初で１，０１４人と昨年度と比べて７６人増加しおり，全登録児童数に占める割合は，６．７％となっている。

＜資料６－２＞　令和２年度の学童クラブの実施場所の確保状況

・学童クラブ事業は，児童１名当たりおおむね１．６５平米を確保すべしという法令上の規定がある。令和元年度中，小学校の余裕教室等を活用するなどの取組を進め，今年度は，利用児童が増加する中でも，基準に基づく活動スペースを確保できている。

・令和３年度も引き続きこの基準を満たし，利用希望児童全員の受入れをすることに向け，余裕の小さい施設を中心に，新しい登録数の見込み等の情報収集に努めながら，小学校の余裕教室の確保に向けた調整を行っているところである。

神部会長　今年は新型コロナウイルスの影響で，放課後まなび教室，学童クラブのいずれも，取組で本当に御苦労があったと思う。私は，放課後まなび教室の登録人数がもっと減るのではないかと思っていた。御苦労もあったと思うが，学校も頑張って実施していただいて，すごいことだと思っている。

まずは，今の説明を踏まえてそれぞれのお立場から御意見を伺いたい。

鳥屋原委員，中村委員には御苦労があったかと思うが，今年度の放課後まなび教室の成果等について伺いたい。

鳥屋原副会長　皆さんも御存じだと思うが，学校は今年度，４月，５月と長い臨時休業があった。６月から学校がスタートしたとはいえ，夏休みまでは，子どもたちも学校も，今でも普段どおりではないが，なかなか普段どおりに近い学校生活が送れていなかった状況である。そのような中，資料を見せていただくと，早い所では６月から，放課後まなび教室が始まっている。本校の場合は９月からだったが，６月から開けていただいている放課後まなび教室もあり，学校も大変だったと思うが，スタッフの方々が学校との連携も取りながら，本当に早い時期にスタートを切っていただいていたのだなと。学校が始まり，コロナ下ではあるがやはり子どもたちの安全な居場所，そして学力保障について，大きな期待と不安があったので，早い時期から放課後まなび教室を始めていただいたことについて，宿題を含めた子どもたちの学力保障という意味では，本当に大きな意義があったと思う。

まだまだ新型コロナウイルスの影響が続いている状態で，放課後まなび教室を開けることができない学校も数校あるとは聞いているが，資料では１６１校中１５２校，約９５％の学校で放課後まなび教室を行っていただいていることは，学校側からしても本当にありがたい話であり，素晴らしいことだと思っている。

中村委員　鳥屋原副会長が京都市全体の話をされたので，本校の事例を説明する。本校は，全校児童が

１５０人少しで，全て単級の大変小さい学校である。まなび教室の登録も，例年，約２５人が続いていたが，今年度は想定よりも少ない人数の申込みになった。理由だが，今年度は７時間目までの授業が始まっていることが考えられる。４５分の授業が４０分になっているが，７時間目の終了は，通常の場合と比べて１０分から１５分程度，遅くなってしまう。７時間目までの授業を終えた子どもたちが放課後まなび教室に着くのは１６時前くらいになってしまい，放課後まなび教室は１７時までなので，活動時間が１時間あるかないかになってしまう。宿題は，１時間あれば十分できる時間ではあるが，子どもたちもさっと取り掛かってさっと終わることが難しい場合がある。

しかし，登録している子どもたちにとっては，放課後まなび教室の先生にほぼ１対１に近い状態で宿題を見てもらうことができたり，色々なお話を聞いてもらったり，触れ合いという部分では，大変ぜいたくな時間を過ごすことができているのではないかと考えている。先ほど，放課後まなび教室の役割として，自主学習の場と子どもの安心安全の場という風に二つの大きな目的の話があった。放課後まなび教室は，今年は学習面で大変厳しい状況である中，家庭学習を補っている部分も大きい。しかし，それ以上に，子どもが心の負担というか心の中で色々抱えているものを，色々な場所で色々な人に受け止めてもらえる，そのような場所の一つとなっていることが大きく，子どもたちにとって大変ありがたい場になっているのではないかと思う。

神部会長　臨時休校があり，子どもたちの学力格差がいつも以上に大変心配される中で，各学校の皆さんがこうして苦労しながらも放課後まなび教室を開いている。子どもたちの学びの格差への対応という役割は，いつも以上に大変大きかったと思う。ずっと家の中に閉じ込められ，子どもたち同士で交じり合う機会もない中，教室の中で一緒になって学び，遊べる機会を作っていただけたというのは，子ども自身にとって本当に良いものであったと思う。心のストレスを発散する，解消していく点で，今年に関しては，放課後まなび教室の意味は大変大きかったと思う。

そのようなことも踏まえ，内田委員と野村委員が，PTA の立場，保護者の立場から見て，放課後まなび教室，学童クラブの活動をどのように見ていただいているかという辺りも含め，御意見を伺いたい。

内田委員　子どもが放課後まなび教室に参加させていただいているが，毎年楽しみにしている。今年は４月から休校だったので，家で勉強等をしていたが，家ではゲーム，テレビ等の魅力的な遊びが多いためどうしても集中せず，そうすると親としても大変な勢いで怒ってしまうので，しばらくの間，子も親もぎくしゃくしてしまっていた。

私の学校では６月から放課後まなび教室を開いていただけたので，子どもは大変喜んで行った。ただし，先ほどの話でもあったように，高学年である５年生であり，授業時間が多くなるので，放課後まなび教室の時間は１時間程度になる。その間に宿題，ワーク等を行うが，親としては，魅力的な遊びがなく，しっかりと宿題をやって帰ってくるので助かっている。やり終えた分だけ升目を塗るシール等，先生方が工夫してくださっており，一定数終わると校長先

生から賞状をもらえるのが大変うれしいようで，数多くやるようになった。楽しそうに勉強してくれており，保護者としては大変助かっている。当初，学校に行きたいけど行けず，家では親に勉強しろと言われるという形でストレスがあったと思うが，今はもう，生き生きと学校に行っている。スタッフの方も顔なじみであり，ありがとうございますと御挨拶をさせていただくと，「学校は子どもの笑い声等がないとだめなので，スタッフとしてもうれしい」と言われたのが印象的だった。

コロナ下ではあるが，消毒や，放課後まなび教室の前には子どもたちに手洗いさせる等，感染症対策を徹底していただいているので，保護者としては安心して子どもを放課後まなび教室にお任せできる状態になっている。

野村委員　私の子どもは，中学３年生になったが，小学校１年生から４年生の間，学童クラブがなかったら放課後を過ごせなかった。現在も，１年生の時から続いた友達関係が，ずっと居心地の良いものとなっている。学校だけではないお友達とのつながりを，大変ありがたく思っている。

本校の学区には児童福祉法で守られている施設があり，そのようなことを踏まえ，家庭環境によって学力の差が出ないように，例えば図書館を開放してテスト前は自主学習ができるようにするなど，学校と一生懸命取り組んでいたが，本校は１学年が２００人いる中学校なので，コロナ下では密を避けるためにできていない。

様々な先生方が，本当に一生懸命に取り組んでくださっており，現在，本校ではコロナ感染者はまだ出ていないが，身体的な理由で入院しなければならない子どもたちもおり，コロナ下での ZOOM を活用した授業について，積極的に先生方が取り組まれた。学区内に病院が多くあるので，親の仕事の都合上，欠席が続く子ども等もいる。ZOOM で授業に参加することに対して，子どもたちにとってはつらい状況もあるが，健康と命を守るということをしっかりと理解してくれている。自分たちの学校は自分たちで作りあげていくという力強い生徒会があるので，私たちはそれをバックアップしていく学校応援団として取り組ませていただいている。

神部会長　子どもたちが楽しく行ってくれているという話は，先生方にとって励ましのような言葉だと思う。学習のリズムのようなものが崩れがちになってきてしまう中で，放課後まなび教室に通うことによって学びも含めた生活のリズムが作れたというのも，一つの大きな成果だったのだと思う。

続いて，常山委員と清野委員だが，常山委員は，放課後まなび教室のスタッフとして，今年も関わっていただいている。清野委員は，PTA 活動をされ，学童クラブにお子様が関わっていらっしゃった。まず常山委員に，放課後まなび教室のスタッフとして関わった中で，今年一年感じたことを伺えたらと思う。

常山委員　放課後まなび教室のスタッフの立場から，述べさせていただく。

まず，放課後まなび教室の意義である，自主的な学びの場と安心安全な居場所の提供は，今年のこのような状態においても達成されていると感じている。

自主的な学びの場ということでは，用意されているプリントを３枚やると決めて来た，算数

のここが苦手だから今日はこのプリントをやりに来たという風に，目標を持って来ている子どもが多いと感じている。

安心安全な居場所ということでは，家族の方や学校の先生以外の方との交流が減っている中でも，それ以外の人たち，例えば私のような大学生とか，５０代，６０代の方と話せる機会になっており，意義のある場所となっているかなと思う。私の場合，年齢が近いこともあり，今流行している鬼滅の刃や，女の子であったら NiziU の話をすると大変盛り上がることが良さかなと感じている。そういったなかなか学校の中で経験できないことや，この忙しい状況でできていないことを，放課後まなび教室が担えている部分があるのかなと感じている。

ただ先ほどおっしゃられたように，7時間目がある子どもがいると，来る時間に差ができてしまうことがある。低学年の子はすごく早く来る，高学年の子はちょっとゆっくり来る，ということがある。そうすると，折り紙等をしている子どもと，真剣に学びに取り組む児童が同じ場にいるので，スタッフ側もてんやわんやしている場面が生じる。そういうことに難しさを感じている。スタッフの数が多ければ何とかなる部分もあるかもしれないが，このコロナ下の状況ではスタッフを増やすのも難しいと思っており，私だけかもしれないが，ジレンマを感じている部分もある。

神部会長　仕事柄，いろんな人たちに「つながれつながれ」といってきたが，今年は「つながるな，つながるな」と言わざるを得ず，矛盾を感じながら仕事をしてきた。しかし，今のお話にあったとおり，今年は特につながりということが難しかった中で，放課後まなび教室の中では，常山さんのような若いスタッフやお年寄りの方等，色々な地域の方たちがここで子どもたちとつながりながら，子どもたちにとっても大変良い，体験の場になっていると改めて感じた。

清野委員には，学童クラブに行った経験とか PTA の立場から，今年の報告を聞いていただいて感じたことなどを伺いたい。

清野委員　私は３人子どもがおり，上２人が高校生で，末っ子が小学５年生である。３人とも学童クラブや放課後まなび教室なしでは生活ができなかったくらいに，本当にお世話になった。

今年度，小学校の PTA 会長をさせていただいていて，コロナ下の中でも何度か学校に行くことがあった。情報が錯そうした中で，何とか子どもたちが通えるようにしたり，家で面倒を見られない子どもを学校で見ようとしたりする先生方の取組について，本当にありがたいと思った。

小学５年生の末っ子は，今は携帯，ゲーム等で，自粛期間中でも友達と会話ができるが，休みが続くのが楽しいかと言われれば，そうではないと言う。勉強はそんなに好きではないが，教室でみんなと勉強できるという状況がこんなにありがたいことだったのかと言っていた。子どもたちもこの状況下で，我慢しているのだと思った。

先ほどからおっしゃられているとおり，早々に放課後まなび教室を再開してくださったり，自粛期間中でも学童クラブを開いてくださったり，感染対策をしっかりと行っていただいたり，大変悩まれたと思うが，保護者からは感謝しかない。

神部会長　子どもたちが改めて学校の楽しさを実感してくれたことは，前向きに捉えたい。学童クラブの運営についても，働いている親のお子さんたちを預かるため，簡単に休止等できない状況で本当に御苦労されたと思うが，そういったことも含めて，学童クラブの今年の状況等を，まずは國重委員から御報告いただきたい。

國重委員　今年は，まだまだ続いているが大変な１年である。現場は，ただでさえ平成２６年度以前から登録者数が１．５倍となり，学童クラブで１３，０００人，地域学童クラブを入れると１５，０００もいる。その子どもたちの安全を守り，放課後の豊かな生活を保証していくという観点から活動，展開をしてきているが，法令の改正があって１人当たり１．６５平方メートル以上の面積を確保しなければならず，現場と連盟と行政の方とで協力をしながら，施設外クラスや分室を設けながら，全員の環境を守ると取組を続けている。しかし，今年のコロナ下で，現場では受け入れながらもコロナの感染を防ぐという，ある種二律背反するような状況の中で展開をしてきたというのが実情である。各現場では様々な工夫を凝らしながら，新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するために協力を続けてきた。具体的な話は，後ほど木戸館長の方からも現場の話があるかと思う。

私の方から申し上げておきたいこととして，学童クラブの子どもたちについては，ニーズが見えやすい。一方で，自由来館で児童館に来る地域の子どもたちについては，フラストレーションを発散させたり，色んな思いを受け止めてもらったりする場が一定期間閉まったため，フラストレーションがたまっているのではないかと思う。

資料４に児童館の利用実績が載っており，乳幼児は約２２万人，中高生が約３万人，大人が３３万人いる。学童クラブ以外で，これだけの方が自由来館で利用してくださっているが，今年は減っているだろうと思う。乳幼児にしても中高生にしても，世代を超えて，児童館という居場所の中で，色々な交流を図っていくことが，児童館の一番の，ほかの施設にない特色と思っている。来年度以降，学童クラブを加えて，自由来館で色々な世代が交流していく場を児童館の中でどう作っていくかというのが，課題かなと思っている。

木戸委員　新型コロナウイルス感染症のことで，現場は本当に混乱した。マスコミからの情報もどれが本当なのか，どうすればいいのか，現場に任される部分が多かったのでその都度大変だった。学校がお休みの間，特例で子どもたちを預かっていただいたことは，日頃狭いところに多くの子どもが集まってくる児童館・学童クラブとしては，子どもの安全という意味で大変ありがたいことだったと思う。

新型コロナウイルス感染症の影響で，学校に行けない子どもたちが，大変多く公園等に集まっていた。児童館は開いていたが，自由来館の部分を止めていたので，一歩外には多くの子どもたちが行き場を失って公園にやって来ている状態で，そこには乳幼児の親子も，小学生も，中学生も来ていた。子どもたちも気を使っていて，午前中はそんなに出てこないが，午後になるとたまりかねてか，夕方遅くまで外で遊んでいる状況があった。これに対して私たちも，児童館として何ができるかということで，子どもたちの安全を見守り，今どういう風に過ごすことが適切かということを子どもたちに話したりとか，子どもたちの状況を聞いたりしていた。

そして必要があれば，小学校や中学校と連携させていただき，学校の先生にも様子を見に来てもらったりした。

保護者の方も大変不安定な状況で，徐々にリモートワークや在宅でのお仕事が多くなってきた方や，お仕事が急になくなったという方がいた。しかし，医師，保育士，看護師といった方は，どうしても休めず，心配をしながら子どもを学童クラブに預けてお仕事を続けていただいていた。子どもたちだけではなくて，地域の中や保護者の方の変化を感じていた。

ようやく学校が再開し，生活リズムが大きく崩れていたり，連日ゲームをしていたりしていた子どもについて，日常が戻ったということは，子どもたちにとっては大変大きなことだと改めて感じた。その中で，学校でも色々な注意をされ，皆で気遣いながらの毎日だったからだと思うが，子どもたちが学童クラブに帰ってくるときに，地域の人にも言われるくらい，すごい大きな声を張り上げながら走って帰ってくることが長らく続いた。子どもたちは，どこかでストレスを抱えていて，それを発散する場所を求めている場面がたくさん見受けられた。

児童館は，そもそも面積が狭く，教室が分かれているわけでもなく，一人一人の机があるわけでもない。その中で過ごすには，子どもたちにも本当に頑張ってもらわないと安全を維持することができなかった。職員の消毒作業は，それなりに今も続いており今も大変だが，それだけではやっていけない。スタンプを押してそれが消えるまで洗うとか，熱を測るのも，ちょっと楽しみながらできるように，子どもたちと随分考えて工夫をしていた。

京都市の学校に通われている方は，それなりに放課後まなび教室等の居場所があるが，京都市の学校以外の小学校に通われている方もたくさんいらっしゃる。そのような子どもには地域の場所しかないので，児童館としてはそこにも関わった。児童館としては，密を避けると言いながら，とても密な状態で毎日過ごしているが，子どもたちは，人と人とが関わり合いながら色々なことを感じたり，失敗したり泣いたり，もちろん怒ったり喧嘩したりもあるが，そこでの学びの大きさを改めて感じている。安心安全を確保したうえで，児童館が大事にしてきた子どもたちが関わり合うことの大事さ，地域の中で子どもたちがそうして育っていく場所の大事さを改めて感じた１年だった。

稲川副会長　國重委員，木戸委員がお話ししていたとおりだが，職員としても新型コロナウイルス感染症の感染を大変怖く思い，場所も狭い中，現場が大変苦労してその辺りのところを一生懸命やってきたところを，私も運営委員長として見させていただいたところである。

また，私にも保護者の方から，「児童館，学童クラブがなかったら私たち絶対仕事できていませんし，本当に感謝しています」という話があった。９月から一般の児童，乳幼児のお子さんの受入れも始まったが，やはり子どもがどこにも行くところがなく，改めて児童館について，ある時はそうは思わなかったが，何かあったときはなくてはならない所であるという御意見も色々な所からお聞きした。今後，行政の方にも色々なアイデアを出してやっていきたいと思う。

神部会長　　様々な立場から，放課後まなび教室，学童クラブのあることについてお話を伺った。運営する側も大変だったが，その一方で，子どもたちにとってすごく大きな居場所だったということ

を，改めて皆さんのお話を聞きながら感じさせていただいた。

来年どうなるか分からないが，いつまでも大変だったという苦労ばかり言っていても状況は変わらない。学校，家庭，それに何より子どもたちが，改めて放課後まなび教室や学童クラブの場が持つ意味や意義に気付いたというのは，良い意味で大きかったのではないかと思う。この一年があったから，これから皆がもっともっとこうした放課後まなび教室や学童クラブの場の大切さを理解し，子どもたちにとって豊かな学びの場，遊びの場を作っていけたらと思う。あの一年はそう言う意味を持っていたのかと，１年２年たった頃に言いたい。そういう可能性を私自身，お話を聞きながら感じさせてもらったところである。

少し出てきたが，まさに議題の２がその新型コロナウイルス感染症に関わるところである。

では，まずは事務局の方から説明をお願いする。

＜新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた放課後まなび教室と児童館・学童クラブ事業との連携（情報共有等）について＞

事 務 局　　**＜資料７＞　両事業における新型コロナウイルス感染症への対応と今後の方向性について**

（児童館・学童クラブ事業）

・学童クラブ事業についてだが，コロナ下で主要学校が臨時休校する中，基本的には開所していたが，完全に通常どおりというわけではなく，保護者の皆様に対し，可能な限り家庭での保育に協力いただきたいという呼掛けをしながらの運営であった。この呼掛けは，小学校が臨時休校をやめて，通常の授業を開始した６月１５日までであり，それ以降は，感染の拡大防止に最大限配慮しながら，通常運転となった。この点，児童館事業については登録制の学童クラブと異なって不特定の利用者が来ることを考慮し，６月３０日までをお休みとして，７月１日からは，事業を選別しながらではあるが，一斉に再開した。

・コロナ下での事業実施における諸課題についてだが，両事業共に，より広いスペースで展開できることが感染症拡大対策において有効であると思われるが，施設の中のスペースは限られている。そのような中，各施設においては，児童の密集を防ぐために外遊びの時間を多く設ける，昼食やおやつの時間をグループごとに時間を分けて設ける等，児童同士の距離を保つため，地道な工夫や努力をしていただいている。本市の限られた財政状況の中，事業実施場所を新たに設けることは困難であるため，財政支援の充実を国に要望している。

・感染が疑われる場合や感染者が発生した際について，利用児童や職員等がいわゆる濃厚接触者に該当する，又は恐れでPCR検査対象となった場合，他の利用者に対し，検査結果が判明するまでできるだけ施設利用を控えるようお願いしている。また，利用児童や職員等の感染が判明した場合は，しばらく施設を臨時休所している。これらの具体的な取扱いについて，今後検査環境の動向や，事例の積重ねにより判明したこと等に基づき，感染拡大防止と子育て支援や社会経済活動の両立の観点から，見直しの要否等について検討する必要がある。

・実施する場所や，事業の役割に関して，ジレンマを抱えながら運営をしているが，これと

放課後まなび教室との連携，ことやものを共有する連携やそれに先立つ情報の連携により，何か発展の糸口がないかと思っている。

（放課後まなび教室）

・放課後まなび教室は，小学校の臨時休業期間中は全て休止し，小学校再開後，感染拡大防止対策等が整ったところから，順次再開している。開講に当たっての基本方針は，箱書きのとおり示しており，各放課後まなび教室の開始時期は，学校・地域ごとの事情を踏まえ，個別に判断している。

・コロナ下での事業実施における諸課題についてだが，実行委員会・地域スタッフの方の御理解と御協力の下，１１月末時点で，１６１校のうち１５２校で実施できている。未実施の学校については，スタッフが高齢・持病等でコロナ下の実施に強い不安を抱えている，スタッフを十分に確保できないといった点が課題となっている。

・感染拡大防止対策等による事業への影響についてだが，事業実施前後及び実施中の物品等の消毒作業が発生するため，スタッフ等の作業負担や経費の負担が生じている。また，座席の間隔を確保することにより，１部屋当たりの児童数が減るため，条件が許す学校では，部屋を増やして実施している。この場合，スタッフの活動日時が増えたり，体制を変更したりすることがあり，実行委員会・スタッフの方に御負担が生じている。一方で，１部屋当たりの人数が減る中で追加の教室を用意できない場合など，学年や曜日の分散実施を行っているケースもある。この場合，子どもの利用日数が減れば，利用児童・保護者への影響がある。

（今後の方向性）

・今後は，両事業共に，引き続き，感染拡大防止対策を図りながら運営を進めるとともに，他の感染症も含めて有効な対応については，保護者，事業者等の負担も考慮のうえ，適宜続けていく。

・そして，人材を確保できるように，広報媒体の活用，児童館人材マッチングセンターの活用，関係者への働き掛け等を継続して実施していく。

・さらに，地域にもよるが，今後も場所の確保は課題になってくると考えられることから，使用できる余裕教室等がある場合は，積極的に調整を図る。

・放課後まなび教室については，高齢のスタッフが多いことから，今回のような新型コロナウイルスの対応等については，実行委員会・スタッフで十分な調整を行っていく。

・学童クラブについては，大勢の子どもたちが集まることが前提となった事業であるため，３密を避けるべく，今後も，各施設の状況把握に努め，現場と連携しながら，感染症予防のための必要な措置を講じていく。

＜資料８＞　感染拡大防止対策等を踏まえた今後の両事業の連携について

・主な連携例としては，放課後まなび教室登録児童が児童館・学童保育所の行事に参加する，逆に児童館・学童保育所児童が放課後まなび教室に参加する，両事業の実態や子ども

たちの状況・課題等について研修する，安全対策に連携して取り組む，児童の健康状態等について情報共有を図る，といったことが挙げられる。

・実施状況については，１⑴の表のとおりであり，令和元年度は，新型コロナウイルスの影響も少しあったかと思うが，減少している。

・連携の取組を進めていくうえでの主な課題としては，物理的な距離，実施日の違い，体制上の余裕，関係者の理解，子どもの所在確認に加え，現在は，新型コロナウイルスの影響も出ている。

・連携を進めていくに当たってのこれまでの本市の取組としては，ガイドラインや連携推進取組事例集を作成したり，学校と学校に隣接する児童館等の望ましい連携の在り方を研究する学校を「放課後まなび教室リーディング校」として指定するなどしたりしている。

・コロナ下における両事業の連携について，それぞれの事業の利用ニーズに対応し，安全かつ質の高い居場所を提供することを前提としたうえで，今後想定される感染状況に応じた連携について，幅広く検討していきたいと考えており，御意見をいただければと考えている。

・具体的には，まず，２⑴に記載している「事業間における情報共有」であり，重複する登録児童がいる場合，登録児童の健康状態や出欠状況等について，スムーズな情報共有が行われることや，お互いの事業の理解が進むことにより，より良い対応を取ることができると考えている。そのための方法としては，日常の連絡体制の構築に加え，学校運営協議会やスタッフ会議等に両事業の関係者が参画しているケースがある。また，他の地域の先進的な事例が役立つケースもあるかと思われるので，より積極的に情報の発信を行っていきたいと思っている。

・２⑵に記載している「場所，研修，合同プログラム事業等の連携」については，お互いの理解が進むことや，新型コロナウイルスの状況が一定落ち着いてくることが前提となってくるケースが多いかと思うが，合同プログラムの実施，両事業の職員・スタッフの研修会への相互参加，相互の人材活用や紹介等を進めていきたいと考えている。

神部会長　　両事業における新型コロナウイルス感染症への対応と，両事業の連携について御報告・御説明いただいたが，この点について，一言ずつ皆さんからお話をお伺いしたい。

新型コロナウイルス感染症の中で事業を実施していく，その中で皆さんが工夫された点，あるいはこれからも１，２年は同じような状況が続くだろうし，実施しながら感じた課題があれば，お話しいただけると皆さん参考になると思う。

鳥屋原副会長　放課後まなび教室に関して言えば，学校の教室を使っていることがほとんどであり，子どもたちは，学校の授業の延長というか，学校からそのまま行くことが多い。このため，我々学校で指導していくことをスタッフの方が同じように，又は放課後まなび教室としての注意を新たにしていただいているので，随分たくさんの工夫を，放課後まなび教室ではしていただいて

いるのではないかなと思う。現在，放課後まなび教室を行っている学校について，それぞれの条件が違うので一律には言えないが，聞くところによると，本校でもそうだが，教室に入ったらまずアルコール消毒をするとか，一般的なことではあるがこまめにやっていただいているのではないかと思う。

不安材料は，既に書いてあることだが，放課後まなび教室のスタッフの高齢化が非常に心配である。現に数校開かれていない理由として，高齢のスタッフの方が多いので感染拡大，又は感染するということがあり，学校側としても大変心配する部分であって，対策等にも記載してあるように，スタッフの確保は非常に重要なことではないかなと感じている。

中村委員　コロナ下ということで，感染症対策・感染防止対策はまだしばらく続くと思う。子どもたちの心と体を考えたときに，社会の不安定さとか，見通しが持てないといった部分について，先ほどからストレスという言葉で出ていたが，目に見えないような大きな圧迫感を一人一人感じているのではないかと思う。大人にもゆとりがないので，それを子どもたちが敏感に感じ取り，普段なら言わないようなわがまま等も出てくる。そうすると，学校の私たちも含めて大人の方も，学習に追われ，しなければならないことがたくさんある中で，どうしてそのようなことを言うのかという注意をしてしまったり，叱ってしまったりすることが出てくる。御家庭でも一緒ではないかなと思うが，そういうあまり良くない方の連鎖に陥ってしまったときに，どのように子どもたちを元の正しいところに持っていくのかという辺りで，課題にも挙げてくださっているが，情報共有が大事なのではないかと思う。

継続して子どもたちを見守っていくことが大事であり，学校では先生，家庭では御家族，地域の皆さん，放課後まなび教室の先生，学童クラブの先生というような色々な人たちの中で，子どもたちが話を聞いてもらったり，受け入れてもらったりする経験が，とても大事になってくるのではないかと感じる。

放課後まなび教室や学童クラブの先生とは，子どもの出欠や，ちょっとけがをしたといった健康面のことについては，今までも連絡をしていたが，それ以上に，今日はちょっと調子が良くない，いつもより元気がないといった様子や心の面についても引き継ぎ，上手に情報共有をしていけるように，その間に立つのが学校ではないかと思っている。ポストコロナであったりウィズコロナであったりと言われている中で，学校が十分その働きができるかは，今ここでなかなか言えないところもあるが，そんな風に一人の子どもを多くの目で見ていく，それの真ん中に入っていくのが学校ではないかと思っている。

神部会長　続いて内田委員，野村委員の立場から，これから放課後まなび教室や学童クラブに望むこと，期待することがあればお話いただきたい。

内田委員　私の学校での放課後まなび教室では，子どもたちが放課後まなび教室に入る前には，水道でせっけんをつけて手を洗い，その後教室に入る時に消毒液で消毒する形を取っていただいており，マスクについても，鼻を出している子がいれば入る前にチェックしていただいている。また，私の学校の PTA でもそうだが，児童の使っている教室を借りるときには PTA の方

で机等の消毒をすることになっており，放課後まなび教室のスタッフの先生方にも同じようにしていただいている。私も会議等で学校に行った際，帰りがけに一緒に掃除を手伝ったりしているが，私が見逃していた，子どもたちの触るドアの取っ手までやっていただいており，気を使って，一所懸命子どもたちのためにやっていただいていると感じている。

新型コロナウイルス感染症がこれで終わることはないと思うので，コロナとある程度共存していきながらの学校，放課後を色々と考えていかないといけない。あまり敏感になりすぎると，子どもにストレスがかかってしまう。我が家では，帰ってきたら最初に手洗いとうがいをさせ，その後に消毒液で消毒をし，初めて台所，自分の部屋等に行けるように徹底をさせており，やるべきことはちゃんとやってください，それでかかってしまったら運が悪かったという感じのスタンスを取っている。インフルエンザもそうだが，予防接種をしてもかかる時はかかってしまう。新型コロナウイルス感染症はかかると本当に怖いが，それを子どもに押し付けると子どもの息が詰まってしまう。学校の方にも色々とやっていただいており，徹底していただいたら，もしかかってしまってもそれは誰のせいというわけでもないので，そこを心配して逆に子どもたちが生き生きできないような環境にはしていただきたくないという思いがある。

野村委員　子育てを振り返ると，ずっと児童館にお世話になっていた家庭であった。児童館で教えてもらったお手玉，けん玉，将棋，オセロ大会等，今年は色々なことが経験できなくなり，今の１年生や２年生も少し寂しい思いをしているかと思うと，児童館の先生方も大変だと思うが，子どもたちの心を育てていく教育の専門家として，何とかお願いしたい。

神部会長　続いて常山委員と清野委員に，それぞれの立場から考えておられること，課題だと思われていることをお話いただけたらと思う。

常山委員　スタッフの対策としては，アルコール消毒はしっかりやっており，手の消毒はもちろんのこと，本は一度使ったら棚に戻さずに箱に置いておき，別途消毒している。また，タブレットは，不特定の子が使うと問題があるのでやめて，その代わりに折り紙や塗り絵のバージョンを増やす等，できることを拡充していく形で対策しており，児童もそのような中で大変楽しんでいると感じている。

一方で，資料に記載されているとおり，高齢化が進んでいることを実際に問題として感じており，私が通っている学校でも，私一人しか大学生がいないという状況である。私が先ほど述べたとおり，大学生ならではの価値というか，年齢が近いからこそ話せることもあるので，大学生等の若い人に周知をしていきたいと思っている。例えば大学生で経験したことのある人が身近な人に声を掛けるとか，経験者が教育関係の授業等で放課後まなび教室の良さを自分の言葉で語るとか，放課後まなび教室は自分の予定に合わせながらも大好きな子どもと関わることができると働き掛けるとか，そういったことをしていければ，もっともっと若い人が入って来るのではないかと思っている。

清野委員　先ほど内田委員もおっしゃっていたとおり，新型コロナウイルス感染症に関しては個人で

感じられることが違うというか，どこまで頑張る，どこまでができないといったことが大変バラバラである。私たち大人も初めての経験で，子どもたちに正解を教えられない状況である。そのような中で学童クラブや放課後まなび教室では，子どもが柔軟に対応しているというか，しっかりマスクをつけていたりとか，当たり前のように手を洗ったりとか，消毒をするとかできており，先生やスタッフの方のおかげだと思っている。

先ほどからおっしゃられていたように，今まであったもの，当たり前だと思っていたものが，今回のコロナ下で，それは特別なことで，助けられていたのだということを改めて認識したので，今後も子どもたちの心のよりどころであっていただきたいと思う。保護者，学校等，情報共有も大事だが，子どもたちが目に見えないストレスの中で発信していることを取り逃さない環境づくりが大事と思っている。

神部会長　続いて國重委員，木戸委員及び稲川副会長に，それぞれの立場から考えておられることをお話いただけたらと思う。

國重委員　皆さんのお話であったように，新型コロナウイルス感染症については各児童館，学童保育所共に，地道な感染防止の取組を進めているところであり，引き続き，続いていくのだろうと思っている。

そのような中，放課後まなび教室との連携という話について，連携という意味では情報共有が一番大事になってくるかと思っているが，放課後まなび教室との連携というよりも，児童館又は学童保育所と，放課後まなび教室を含めた学校との連携が，今後もっともっと重要になってくるのだと思う。児童館での活動をブラックボックス化しても，学校の活動が地域から見えないということでもだめだろう。地域の子どもたちの拠点施設として児童館が果たしていく役割，そして学校が果たす役割があるので，児童館も含めた地域の施設と，学校との情報の共有を今後もっともっと進めていくことが前提になっていくと思っており，まだその辺に課題があると思っている。学校との連携，情報共有を進めていく，その結果として，放課後まなび教室との情報の共有等も進んでいくだろうと思っているので，学童クラブの子どもたち，放課後まなび教室の子どもたち，また地域の子どもたちを含めた，放課後の子どもたちの問題をトータルとしてどう考えるのかということを，児童館も含めて学校と一緒に連携して，そういうことを議題として載せるような，そういう情報共有の場が必要になってくるのではないか。もっとオープンな形で進めていくことが大事なのではないかと思う。

木戸委員　児童館も高齢のボランティアさんが多いが，自分の児童館ではしばらくお顔を見せていただいていない方もいる。学生のアルバイトさんやボランティアさんについても，大学の方で届け出制になっていたりとか，活動の範囲を決められていたりとか，なかなか学生さん自身も動きづらい毎日をお過ごしだと感じている。

私が放課後まなび教室と児童館，学童クラブとの連携で大事にしていきたいなと思っているのは，子どもの選択肢がたくさんあることであり，そして，子どもを見守る人たちが多様に子どもに関わっていただいてるということに，大変意義があるように感じる。

学童クラブを利用するのも，放課後まなび教室を利用するのも，ある一定，保護者の方の動きを必要とする。学童クラブに入館するために多くの書類を出していただくとか，保護者の方に大変な御負担をお掛けしているところがあるが，児童館は，子どもたちが自分の意志で，自分の足で来られる場所なので，そこの存在もすごく大事だと思う。何人か御発言いただいたが，子どもは小学生だけではなく，幼児，中学生，高校生もおり，保護者の方にも私たちにもあるが，わざわざ悩み・相談があるといって相談機関に行くほどでもないけど，ちょっと聞いてほしいとか，こんなこと思っているといったことについて，地域の中で行ける場所，子どもたちのそのような窓口になれたら良いといつも思っている。

國重委員がおっしゃったみたいに，子どもたちの放課後について，どこがどうということも大事だと思うが，それをお互いに理解しあいながら，皆でどのようなことができるのか話し合えて語り合えるような，そういう風な場所が，今後もあってほしいなと感じた。

稲川副会長　連携については，書類上ではそういった場所をという形になっており，そこで終わってしまうことがよくある。例えば，児童館では地域ごとに区分けされており，小学校の地域分けも踏まえ，児童館の館長クラスと放課後まなび教室のスタッフ等が会う機会を設け，実際会ってみれば色々な話ができて，アイデアも出てくると思う。具体的に何かを始めないことにはずるずる行ってしまうので，具体的に何かをするというのを挙げて，それが成功するかは分からないが，話だけで動かずに終わってしまうのはいけないので，その辺りのアイデアをと思っている。

神部会長　連携に関しては，昨年度と同様，放課後まなび教室・学校と学童クラブとの間で，意外と互いの情報が共有できていないことが分かった。とはいえ今年はこの状況で，とてもそのような余裕はなかったと思う。この会議も年に一回なので，もっと気楽に年に何回かでも，ネットワーク会議みたいな感じでオープンに関係者が集まって，お茶でも飲みながら気軽に話ができるような場を，京都市が音頭を取って作っていただければ，そこから色々な可能性が生まれてくるのかなと思う。特にコロナ下ということで，これも一つのきっかけかなと思う。お互いがそれぞれ工夫しながらやっている新型コロナウイルス感染症対策に関しても，同じお子さんを預かり安心安全の場所を作ろうという点では両方に共通しているので，そういったことを一つのきっかけとし，話題を広げていただけるような場を設けてくれたら良いのかなと思う。

あまりにも新型コロナウイルス感染症を恐れすぎて，あれもだめ，これもだめとやっていると，ますます子どもの心が大きなストレスをためてしまうという危惧を，私自身も持っている。そういう意味では，これからの一つのポイントは，正しく恐れることではないか。知識を持たずに恐れすぎているがために，必要以上にあれもこれもと強いてしまっているならば，正しい知識を我々も子どもも持ったうえで恐れるところは恐れ，心配ない，ここまでしなくてもいいという部分を考えていく必要があるのかなと思う。これからは，新型コロナウイルス感染症そのもののことを学ぶ機会があってもいいのかなと思う。京都府，京都市と色々と知識を持って実際に対策をやっている所もあるので，そういう所から正しい知識を学びながら，どう子どもたちと関わり，指導していき，対策を取っていくのかを考える，そういう場もこれからは

必要になってくるのではないかと思う。そういうことも，京都市さんにも御検討いただきたい。

この世界や環境がしばらく変わらないのであれば，我々自身が成長して，少しでも良い形で子どもたちの学びの場，遊びの場を作っていくっていうことを考えていかないといけない，そういう風に思っている。大学でも一回生は大変で，私も１０月になって初めて，一回生の顔を見た。一回生と四回生は一回も顔を合わせておらず，大学自身もどう学びの環境を作っていくか，一生懸命考えながらやっているところだが，そういった情報の共有の場を持つこと，そして新型コロナウイルス感染症のしっかりした正しい知識を持って対策を考えていくこと，その辺りを今回の課題としてまとめさせていただいて，本日の会議は閉めさせていただく。